

## 合理論と経験論における生得観念について

著者	久保田 進一
雑誌名	哲学・人間学論叢 = Kanazawa Journal of Philosophy and Philosophical Anthropology
号	7
ページ	13-30
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/44859">http://hdl.handle.net/2297/44859</a>

# 合理論と経験論における生得観念について

久保田 進一

はじめに

西洋哲学史の近代において、合理論と経験論の二つの立場が登場するが、この二つの立場は認識論あるいは知識論において対立している。その一つの対立点として、観念についての見解の違いがある。合理論においては、観念は生得的に与えられていると言われ、経験論においては、観念は経験によって形成されると言うのである。このように、観念の起源あるいは観念の形成をめぐる、両者の立場は異なるのである。しかも、観念が生得的か経験によるものなのかというのは、お互いに見解上譲れない事からである。

合理論の立場から生得観念を主張したとされるのがデカルトであり、経験論の立場から生得観念を否定したのがロックとされている。しかし、ロックの生得観念の否定は、果たしてデカルトに向けられたものなのであろうか。あるいは、デカルトの生得観念を正しく理解して批判をしているのであろうか。また、デカルトにしても、はっきりと生得観念について言及しているのであろうか。つまり、デカルトの主張する生得観念とは何であるのか。そもそも、デカルトとロックは、直接議論しているわけではないので、この対立はもしかしたら、正しい理解の上で成り立っていない議論ではないだろうかという可能性もありうる。

そこで、本稿においては、まず観念の重要性について触れ、デカルトの生得観念について見ていき、ロックの生得観念説批判を見ていく。そのうえで、ロックの生得観念説が正しいのかを吟味し、デカルトが生得観念説を採用しなければならなかった理由とロックが生得観念説の何を批判しようとしたのかを考察していく。結論としては、デカルトの生得観念説が曖昧であること、そしてロックはそもそも合理論の生得観念説を批判したというよりもイギリス国内のケンブリッジ・プラトン学派の素朴な生得観念説を主張していた人々を論敵としていたことを示す。そして、ロックとデカルトは方法や手段は異なってい

たが、その目指すべき目的は、ある意味では一致していたのではないかということ結論づける。

## 1. 観念の重要性

なぜ、観念が重要なのか。それは、われわれが事物（もの）を認識するときに、観念を用いていると考えられるからだ。もちろん、知覚に関しては観念ではなく、物体を見ているとも言えるし、パークリの言うように物体は存在しないのだから物体を見ているのではなく、観念を通してしかわれわれには知覚できないのだから観念を知覚しているという立場もある。また、目の前に存在せず、直接知覚できないものについても、われわれは何らかのものを思い描くことができる。たとえば、昨日食べてしまって、現在は存在しないリンゴであるとか、現在目の前にいない人物であるとか、直接知覚できない物や人について記憶を頼りにして思い描くことができる。また、現実には存在しないが、空想上のものについても思い描くことができる。たとえば、ドラえもんとかアンパンマンについても思い描くことができる。現実には、本物のドラえもんやアンパンマンは存在していないにもかかわらず、説明することができる。マンガやアニメに描かれたドラえもんやアンパンマンは、本当のドラえもんやアンパンマンと言えるのだろうか。もちろん、ドラえもんやアンパンマンはマンガやアニメから登場してきたのだから、そちらが本物とも言えるのかもしれない。このことは、ここでは詳しく論じないことにする<sup>2</sup>。さらには、数や点や線や三角形などの数学的対象についても思惟の対象として捉えることができる。実際、数や点や線や三角形などの数学的対象は、この現実の世界には存在しないものであり、抽象的なものである。したがって、もともと記憶を頼りにすることはできない。もちろん、図形を通して、点や線や三角形などは理解できるが、それは、点そのものでもないし、線そのものでもなく、三角形そのものではない。この世界には、本当の点や線や三角形は存在しないことになる<sup>3</sup>。さらには、無限や完全といった抽象度が上がっていくものについては、数学的対象に見られるような想像力を伴う図形のようなものはなく、言葉を通して概念として捉えるようになる。

つまり、われわれが事物（もの）を認識するということは、感覚からくる知覚の像を捉えることが基本ではあるが、記憶や想像力、さらには言葉によって、目の前に存在しないものについても認識することができるのは、思惟の対象として観念があるからとも言える。そういう意味では、観念はわれわれが事物を認識する上では欠かせないものと考えられる。

## 2. デカルトの生得観念

### 2.1 観念の三分類

では、デカルトは生得観念についてどのように述べているのであろうか。その前に、デカルトが『省察』（「第三省察」）のなかで、観念を三種類に区別しているのので、その箇所を見てみよう。

「ところでこれらの観念のうちで、あるものは生得的であり、あるものは外来的であり、またあるものは私自身によって作られたものと思われる。というのは、私は、ものとは何か、真理とは何か、思考とは何かを理解しているが、そのことをほかならぬ私の本性そのものから得ていると思われるからである。しかし、いま私が喧騒を聞き、太陽を見、火を感じるということは、私の外にある事物から出てくるとこれまで判断してきた。そして最後に、セイレンやヒッポグリピュスなどは、私自身によって作られたものである。すべての観念は、あるいは外来的である、あるいはすべてが生得的である、あるいはすべてが作為的であると考えられることもおそらくできるであろう。というのも、私はまだ観念の本当の起源を明晰に見通してはいなかったからである」<sup>4</sup>。

また、この箇所に対応する書簡として1641年6月16日のメルセンヌ宛の書簡にも見ることができる。

「すなわち、私は「観念」という語を私たちの思惟の内にあり得るすべてのものと解しており、それを次の通り三つに区分した、ということです。三つと申しますのは、「或るものは外来的」であり、日常的に人々が太陽について持っている観念などがそれです。次いで「他のものは、作られたか、あるいは作為的」であり、その中には、天文学者たちが推論によって太陽について作った観念を含めることができます。それから、「他のものは生得的であるが、例えば、神、精神、物体、三角形の観念、また一般的には、真実で、不変の、永遠な本質を表象するすべての観念である（後略）」ということです<sup>5</sup>。

また、同様に1649年4月23日のクレルスリエ宛の書簡にも見ることができる。

「私はまた、観念の間でも、われわれに生得的なもの、外からやって来るもの、あるいはわれわれによって作られるものを区別しなければなりません。それは、神の観念はわれわれによって作られえた、あるいは神についてわれわれが聞いたことから獲得された、とする人たちの意見を未然に防ぐためです」<sup>6</sup>。

以上のように、デカルトは観念を三分類にしている。すなわち、生得的な観念 (idea innata)、外来的な観念 (idea adventitia)、作られたあるいは創作された観念 (idea facta vel factitia) である。特に、ここで注意してもらいたいのは、生得観念とされる観念である。デカルトは「第三省察」では、神の観念については触れていないが、デカルトが生得観念のうちで、「第一の主要なもの」<sup>7</sup>として考えていたのが、神の観念なのである。なぜ、「第三省察」で取り上げていなかったのかといえば、それは、デカルトがまさに、これから神の証明を行おうとする箇所であり、神の観念から神の存在証明をしようとする「観念の道」だったからである。

## 2.2 生得観念の意味

それでは、デカルトが考えていた生得観念とはどのようなものだったのだろうか。デカルトは「観念の道」に進むことによって、神の存在証明をするのであるが、その神の存在証明をした後に、デカルトは「神が私を創造したとき、あたかも自分の作品に刻まれた製作者のしるしであるかのように、その観念を私のうちに植えつけたということは、なんら驚くべきことではない」<sup>8</sup>と述べている。ここで見られる生得観念はまさしく、観念としての観念であり、精神によって捉えられる対象ということになる。

一方、デカルトは『方法序説』の「第六部」では「世界をつくった神だけを考慮に入れ、それらの原理を我々の精神のなかに生まれつき備わっている真理のある種子だけから引き出そうとした」<sup>9</sup>とも述べている。「生まれつき備わっている真理のある種子」というのは比喩ではあるが、これは観念そのものというよりも、種子から真理という花が開くということから能力と考えるべきである。たとえば、山田も「第一部の冒頭で、人間には良識（理性）が生まれつき備わっているとされたが、それは同時に人間精神が諸々の真理の種子、つまり知識の原理を生得的に宿していることでもある。その種子を外に引き出し、養い育てることだけで、真理はあらわになる。それが人がものを考えるということであり、研究するということである」<sup>10</sup>としている。この点を考えると、「生まれつき備わっている

真理のある種子」というのは、教育をすることによって、真理という花が開くのだということが言える。

そして、生得観念を能力と捉える決定的な記述として、「第三答弁」に次のような記述を見ることができる。

「最後に、われわれが或る観念はわれわれに本有的（生得的）であると言うその場合、われわれはその観念がわれわれに常に顕在しているとは知解してはおりません。——というのは、もしそういうことであるとすると、観念はどれもこれも何一つ本有的（生得的）ではないということになってしまうでしょうから。——そうではなくて、われわれがわれわれ自身のうちに観念を喚起する能力（*facultas*）をもっているということのみ、知解しているにすぎないのです」<sup>11</sup>。

この箇所で見られるように、デカルトは「観念が常に顕在している」のではなく、「われわれ自身のうちに観念を喚起する能力（*facultas*）」をもっていると言っているのである。そうすると、生得観念がわれわれの精神のうちに常にあるとは言えなくなるのである。とりあえず、次に、ロックの生得観念説に対する批判を見てみよう。

### 3. ロックの生得観念説批判

#### 3.1 観念とは？

ロックは『人間知性論』の第一巻で生得観念を取り上げて、観念の生得性について批判をしている<sup>12</sup>。その前に、ロックは観念をどのように捉えているのかを見てみよう。

「このことば（観念）は、およそ人間が考えるとき知性の対象であるものを表すのにもっとも役だつと私の考える名辞なので、私は心象（*Phantasm*）、思念（*Notion*）、形象（*Species*）の意味するいっさいを、いいかえると、思考にさいして心がたずさわることのできるいっさいを、表現するのに、このことばを使ってしまい、ひんばんに使わないわけにはいかなかったのである」<sup>13</sup>。

「およそ人間はすべて思考するとみずから意識するし、思考する間に心が向けられるのは心にある観念であるから、疑いもなく人々は、白さ・硬さ・甘さ・思考・運動・人間・

象・集団・酔いその他のことばで表現される観念のような、いくつかの観念を心にもっている」<sup>14</sup>。

以上のように、ロックは観念を「人間が考えるときの知性の対象であるもの」としている。また、「およそ心は、そのあらゆる思惟 (Thoughts) と推理 (Reasonings) に当たって、心自身の観念 (Ideas) のほかに直接の対象 (Object) をなにももたず、観念だけを観想し、また、観想できる。したがって、明白に、私たちの真知 (Knowledge) はただ観念にかかわるだけである」<sup>15</sup>としている。つまり、観念は知性あるいは精神によって捉えられるものなのであり、観念は思考の対象なのである。実は、このことについて、デカルトも同様のことを述べている。1641年7月のメルセヌヌ宛の書簡に「私たちが或るものを抱懐する時、私たちの精神の内にあるすべてのものを私は観念という名称で一般的に呼ぶのであります」<sup>16</sup>と述べている。また、『省察』の「第三答弁」においても「私が観念なる名称を精神によって直接に知得されるもののすべてと解しているということを示した」<sup>17</sup>と述べている。このように、観念は精神あるいは知性によって捉えるものということに関しては、デカルトもロックも共通している。しかし、生得的な観念があるかどうかは問題なのである。ロックは生得的な観念はないと主張するのである。

ロックは『人間知性論』第一巻の第二章の章題として「心に生得の[理論的]原理はない」と言うように、生得性を否定するのである。ロックは「いったい、知性にはいくつかの生得原理、ある原生思念、共通思念、いわば人間の心に捺印された文字[ないし刻印]があった、靈魂そもその在り始めにこれを受け取って、世に携えてくるというのは、ある人々の間で確立された説」<sup>18</sup>を否定するのである。

### 3.2 生得観念としての「神の観念」

では、その否定する理由はどのような理由なのだろうか。第二章の五節で次のように言う。

「それゆえ、もし子どもたちや白痴に靈魂があり、心があり、それら靈魂・心にそうした印銘があるなら、子どもたちや白痴はその印銘をいやが応でも知覚しなければならず、それらの真理を必ず知り、これに同意しなければならない。が、子どもたちや白痴はそうでないのだから、明白にそうした印銘はないのである」<sup>19</sup>。

ここで言う真理とは、「およそあるものはある」と「同じ事物があつてあらぬことはできない」と言う命題のことである。前者は同一律であり、後者は矛盾律である。ロックは、これらを論証原理と捉え、公準 (maxim) と考えている。ロックは公準や公理は自明な真理であるが、生得的ではないと捉えているのである。もし生得的であるなら、子どもたちや白痴でも理解できるはずだからである。理解できないというのは生得的ではないからだとロックは主張するのである。

また、子どもたちや白痴とは別の例として、他の民族についても取り上げて、生得説を否定するのである。特に、他の民族については、デカルトが生得観念でも「第一の主要なもの」として考えていた「神の観念」についてその生得性を否定するのである。

「いったい、かりにもしなにかの観念が生得と想像できるなら、神の観念こそとりわけ多くの理由でそう考えられよう。なぜなら、どのようにしてある神性者の生得観念なしに生得の道徳原理があるか、想念しがたいからである。立法者の思念なしに法と法を遵守する責務の思念をもつことはできない。が、古代人の間に認められ、記誌の記録に汚点を残す無神論者は別として、航海は、近年、ソルダニア湾やブラジルや、ポーランドィヤ、カリブ諸島などで、すべての人の間に神なるものの思念も宗教も見いだされそうにない民族を発見したではないか。ニコラウス・デ・テチョの「カイグア族の改宗にかんするパラグアイからの手紙」にはこういうことばがある。すなわち、「この種族には神や人間の靈魂を意味表示する名まえがなく、神聖なものも偶像もないと、私は見いだした。」これらは、磨かれない自然[の本性]のまま放置され、文字やしつけの助けなく、学芸の進歩もない民族の実例だ」<sup>20</sup>。

上記の例は、現在では問題になる記述かもしれないが、ロックに言わせると「神の観念」が生得的であるなら、どの人間にも「神の観念」があるはずである。しかし、「神や人間の靈魂を意味表示する名まえがなく、神聖なものも偶像もない」種族もいるのであるから、「神の観念」が生得的であるとは言えないということである。このことは、デカルトのように「神の観念」を生得観念の「第一の主要なもの」と考えていたとしたら、都合が良くないことなのである。

ロックもキリスト教徒であるので、「神の観念」を否定するわけではない。われわれの心の中には「神の観念」があると思っているのは確かである。ただ、それが生得的であるか



どうか問題なのである。そして、「神の観念」が生得的でないなら、その他の観念で生得的であると言える観念はないとするのである。ロックは以下のように述べている。

「してみると、神なるものの知識は人間理知のもっとも自然な発見であるが、神なるものの観念は、これまでに述べてきたところから明白と考えられるように、生得でない。したがって、私は、なにか生得と称することのできる観念が他に見いだされることはまずなからうと想像する。なぜなら、かりにもし神が人々の心のなにかの印銘・なにかの刻印をつけたもうたとすれば、私たちの弱い諸能力がかくも測りしれない無限な対象を受け入れることのできるかぎり、神ご自身のある明晰かつ均一な観念であったらうと期待するのは、もっとも道理にかなっているからである」<sup>21</sup>。

この箇所で見られるように、ロックは「神の観念」が生得観念であることを否定しており、「神の観念」ですら生得観念ではないのであるから、その他の観念が生得観念ではありえないとするのである。

### 3.3 観念は経験からできる

では、ロックは観念がどのようにできると考えていたのであろうか。ロックは、次のように言う。

「どのようにして心は観念を備えるようになるか。(中略)どこから心は理知的推理と知識のすべての材料をわがものにするか。これに対して、私は一語で経験からと答える。この経験に私たちのいっさいの知識は根底をもち、この経験からいっさいの知識は究極的に由来する。外的可感的事物について行なわれる観察にせよ、私たちがみずから知覚し内省する心の内的作用について行なわれる観察にせよ、私たちの観察こそ、私たちの知性へ思考の全材料を供給するものである。この二つが知識の源泉で、私たちのもつ観念あるいは[本性上]自然にもつことのできる観念はすべてこの源泉から生ずるのである」<sup>22</sup>。

以上のように、ロックはすべての観念は感覚と内省という二つの経験から由来するといっているのである。まさに、経験論が経験論である由縁でもある。したがって、ロックの観念の理解からは生得観念が入り込む余地はないのである。また、ロックとデカルトの大きな違

いとして、ロックは感覚に由来する観念を知識の源泉とみなすのに対し、デカルトは感覚からの認識は確実ではなく欺くものとして、最初に知識としてはみなされず排除するのである。ここにも経験論と合理論の対立が見られるのである。

しかし、観念は経験からしかできないとすると、アプリオリな知識はロックには認められないということになってしまう。すべて経験から観念ができるとするとアポステリオリな知識しかありえないことになってしまうのである。たとえば、カントが例に出す「独身者は結婚していない者である」という命題は、調査しなくても真であることはわかることである。このようなアプリオリな知識は経験を必要としないのである。したがって、経験論は自然科学のような経験科学においてはもっともらしい説明がつくが、数学や論理学のような学問には説明がつかなくなるのである。ロックは数について「私たちのもつすべての観念のなかで、単一すなわち一の観念ほど多くの仕方て心に示唆されるものはないように、これほど単純な観念はない」<sup>23</sup>とか「それゆえ、一の観念は、他のあらゆる事物と一致する点で私たちのもつもつとも普遍的な観念であるばかりでなく、私たちの思惟にもつとも親しい観念である」<sup>24</sup>としか述べていないのである。一よりも大きい数の観念は一を足していくことで、より複雑な数の観念ができることを説明しても、一という観念がどういふふうにできるのかについては何も言うてはいないのである。考えられることは、「一の観念は、他のあらゆる事物と一致する点」ということで、事物が一つ一つ存在することが感覚を通して、一という数の観念を形成するということなのだろうか。しかし、一つ一つとして事物を認識するということは、そこで抽象化が行われているのであり、抽象化ということはわれわれの精神のうちに一という数の観念がなければ、認識できないのではないのかと思えるのである。いずれにしても、抽象的な観念にはロックは十分に説明していないように思われる。

#### 4. ロックの生得観念説批判は正しいのか

ロックの生得観念説の批判は経験論的な立場から言えば、正しいように思える。そもそも、ロックは誰を念頭に入れて、生得観念説を批判したのであろうか。一般的にはデカルトが考えられるが、そもそもロックがデカルトの生得観念説を正しく理解していたのかが怪しいのである。なぜなら、デカルトの生得観念説は、かなり曖昧であるように思われるからである。そのことは、ケニーも指摘している通りである。ケニーによると、デカルトの生得観念は概念を獲得する「能力」なのか、精神的行為によって知覚される「対象」な

のかははっきりしていないと指摘している<sup>25</sup>のである。デカルトの言う生得観念が対象であれば、ロックの言う主張はもっともらしいように思えるだろう。しかし、生得観念が能力となると、ロックが批判するには否定されなくなる。むしろ、ロックの主張に近い立場になるだろう。したがって、もしロックがデカルトを批判するのであれば、どういう意味で生得観念を捉えていたかによって、批判の矛先は変わってくるだろうし、的を射た批判であったのかどうかも疑われてくる。

そもそも、ロックが批判しようとして念頭にあった生得観念説を主張する人物は誰であったろう。もちろん、デカルトもそのうちの一人であったのであろうが、それほど中心的に批判する相手ではなかったようである。大槻によると「ロック自身、自然法にかんする第三論文で、初めデカルトと書いて、これを消して「多くの者」と改めた。ということは、かれもまたデカルトを生得論者の一人として念頭に置いたが、それ以外に批判の対象となる者を考えていたということである。『人間知性論』でロックが明瞭に名を挙げて批判する生得論者は、理神論の祖として知られるハーバート・オブ・チャーベリ Herbert of Cherbury ただ一人である」<sup>26</sup>としている。また、エアロンによれば、ケンブリッジ・プラトニストなどが唱えた素朴な生得説だとも考えられている<sup>27</sup>。ケンブリッジ・プラトン学派とは、ケンブリッジ大学を拠点として、ルネサンス期のイタリアのフィレンツェのプラトニズムをキリスト教信仰に取り入れて、信仰と理性の調和を図ろうとした一派である。したがって、彼らの生得説の源流はデカルトではなく、プラトンからの流れなのである。こうしてみると、ロックが批判しようとしていたのは、デカルトというよりもイギリス国内のハーバート・オブ・チャーベリやケンブリッジ・プラトニストではなかったのだろうか。そうすると、ロックがデカルトの生得観念を理解して批判していたのかも怪しくなってくる。

前述したように、デカルトの生得観念はケニーが指摘していたように、曖昧なのである。生得観念として知識の「対象」であったり、知識を獲得するための「能力」であるとも取れるのである。特に、「第三答弁」では、「われわれ自身のうちに観念を喚起する能力 (facultas)」と言っているからである。生得観念が「能力」となると、ロックの主張とそれほど変わらないことになる。むしろ、デカルトは「生まれつき備わっている真理のある種子」とも言っているため、ロックの言う「心は、言ってみれば文字をまったく欠いた白紙 (white Paper)」<sup>28</sup>という比喻よりも説明がいいのではないかとと思われるほどである。というのも、ロックの説明では、なぜ、白紙に書き込まれるのか、あるいは白紙に書き込む

ことができるのかという説明がないのである。ロックが言うのには、「先入見のない知性へ（なぜなら白紙はどんな文字も受け取る）、子どもたちに把持させ信奉させたいと思う教えを注ぎこむのである」<sup>29</sup>としか述べていないのである。これでは、どういうメカニズムで心は観念を持つようになるのかまでは説明がされていないのである。また、なぜ人間のみが観念を持てるのかという説明が足りないように思われる。

一方、デカルトの「生まれつき備わっている真理のある種子」という比喻は、潜在的な知識を持っているということを述べているのであり、正しく水や栄養や日光を与えれば、最後には真理という花が咲くというものである。一応、メカニズムとしては説明がつくように思われる。ロックが幼児や白痴の例を出して、生得観念の存在を否定していたが、これもデカルトの立場から言えば、単に種子から芽が出ていない状態とも言えるだろう。また、非キリスト教徒の例についても、そもそも神の観念ということで何を指すのかで、その意味は変わってくる。文字通りの神なのか。神という語はたまたまつけているだけで、その内実は「無限性」とか「完全性」とか「第一原因」ということになれば、非キリスト教徒の人間も理解しているだろう。たまたま、キリスト教の神を理解していないからといって、「神の観念」を持っていないとまでは言えないのではないだろうか。特に、デカルトは『方法序説』の冒頭で「良識はこの世で最も公平に配分されたものである」<sup>30</sup>と述べている。この良識というのは、フランス語で *le bon sens* のことであり、日本語では良識、常識、思慮分別という意味であるが、デカルト的には理性と呼んでもいいものである。その理性とは、真偽判断の能力でもある。さらに言えば、数学や論理を理解する力と考えてもいい。したがって、非キリスト教徒の人たちが「神の観念」を理解していないと言っても、数学や論理はそれほど高等なものではない限り理解するだろう。そういう意味では、あらゆる人間に「真理の種子」が配分されていると言っているだろう。また、デカルトに言わせれば、動物は自動機械であり、心あるいは精神を持っていないので、観念を持ち得ないということでも説明がつくのである。もちろん、現代の科学的見地から言えば、そうは言えないかもしれないが、デカルトの生得観念説を「能力」としてみるのであれば、とりあえずの説明はついているように思われる。

しかし、一方でデカルトは「能力」ではなく、文字通りの生得説、すなわち生得観念を「対象」として捉えている箇所もある。それがガッサンディからの「第五反論」に対する「第五答弁」の箇所である。まず、ガッサンディは「第五反論」で次のように言う。

「しかしわたしはここで、あなたが「思惟はあなたから引き離されえない」と言われる時、あなたが存在している限りあなたは絶えず思惟していると知解しておられるのかどうかという点について困惑させられます。(中略)しかしあなたが昏睡状態にある間、あるいはまた母胎のうちであってさえ、どのような仕方でも思惟することができるかを理解しえない者たちにとっては、上述のことは納得しがたいことでしょう」<sup>31</sup>。

これに対して、デカルトは次のように答えている。

「しかしながら、靈魂は思惟する実体なので、なぜに、それが常に思惟することがなかったりなどするのでしょうか。われわれが、成人になっており、健康であり、目覚めているという際に、われわれのもったことを知っている思惟ですら、大多数を想い起こすことすらないのですから、靈魂が母胎のうちで、あるいは昏睡状態等々のなかでもった思惟を、われわれが想い起こさないということは、何か不思議なことでしょうか」<sup>32</sup>。

このガッサンディへの答弁が、まさに素朴な生得説を承認する方向を示唆しているとエアロンは指摘するのである<sup>33</sup>。要するに、靈魂が常に思惟しているということは、思惟するためには観念がなくてはいけないのであるから、母胎のうちでも昏睡状態でも観念を持っていないといけないことになる。しかし、ロックに言わせれば、胎児が観念を持ち得るわけはなく、昏睡状態の人間が思惟しているとは考えられないのである。このように、デカルトの生得観念を文字通りの生得観念と捉えようと、かなり困難になるだろう。ケニーが指摘しているようにデカルトの生得観念説はかなり曖昧であると言えるだろう。

こうしてみると、ロックはデカルトの生得観念説をどのように受け入れていたかによるのである。あるいはデカルトの生得観念説が、どのように当時イギリスに伝わっていたのかということである。もちろん、デカルトの影響は、当時のイギリスでもあったので、まったくデカルトの影響がなかったとは言えないのであるが、その伝わり方が文字通りの生得観念説として受け入れられていたら、デカルトの生得観念説の半分しか伝わってなかったことになる。そもそも、デカルト自身が生得観念に対して曖昧であり、どのようにも受け取られる言い方でしかしてなかったのも問題ではある。

そうすると、ロックが批判しようとする論敵は、デカルトというよりもむしろイギリス国内の生得観念説を主張する人たちであり、彼らの考えは「生得の真理が文字どおりその

まま心に記されるという、純粋あるいは素朴な生得論」<sup>34</sup>だったのである。彼らは、デカルト派とも呼ばれており、ロックの論敵であったとも言える。また、ヨルトンによれば、当時流布していた通俗神学者たちの生得的知識の議論もその対象としていたということである<sup>35</sup>。そして、ヨルトンによれば、具体的にはカーペンター (Carpenter, R.)、スティリングフリート (Stillingfleet, E.)、サウス (South, R.) といった素朴な生得観念説 (the naïve form of the doctrine of innate knowledge) のゴリゴリの擁護者の名前を挙げている<sup>36</sup>。この素朴な生得観念説を主張する人たちの考えは、神の観念や道徳原理がそのまま魂に書き込まれた知識としてあるというものであった。ロックは、まさに、こうした人たちの考えに幼児や白痴や非キリスト教徒たちの例を出して、批判していたのである。むしろデカルトは、曖昧な生得観念説を言っていたがために巻き込まれてしまったとでも言ったほうがいいのかもしい。したがって、一般的に生得観念に対する合理論のデカルトと経験論のロックの対立という構図は、正確ではなかったと言えるのではないだろうか。

## 5. デカルトが生得観念を採用した理由

デカルトが生得観念説を採用した理由を考えてみよう。これは、デカルトが確実なものを探求するという方法からして生得観念説を主張しないわけにはいかなかったところがある。なぜなら、デカルトはアリストテレスの学問体系に代わる新たな学問体系を基礎づけるために、確実なものを求め、そのために方法的懐疑を行い、その際に最初に認識の上で排除したのが感覚だからである。ロックは感覚からくる観念を認識の基礎に置いたが、デカルトは排除したのである。デカルトは「第一省察」で「感覚が時として欺くことがあるのを私は知っていたので、われわれを一度たりとも欺いたことがあるものには、けっして全面的な信頼を寄せないのが賢明というものである」<sup>37</sup>としている。これはロックの観念の由来の考え方を否定するものである。

また、デカルトが生得観念を主張しなければならなかったのは、神の存在証明に大きく関わっている。特に、「第三省察」における「神の第一証明」に関係してくる。この「神の第一証明」は、私の持っている観念の起源を探求することによって、神の存在にまで至るという証明である。いわゆる「観念の道」を通して、神の存在証明がなされるのである。このことが、なぜ生得観念と関係するのかといえば、デカルトは「第三省察」の初めに観念を三分類に分けており、観念の起源として、生得的観念、外来的観念、作為的観念としていた。神の観念が外来的観念ではありえない。なぜなら、外来的観念は感覚を通して形

成される観念であり、デカルトは感覚を最初に排除していたために、神の観念が外来的観念であることはないからである。また、作為的観念についても、この観念は私が想像や創作によって作られる観念である。たとえば、キマイラなどが、この作為的観念に当てはまる。キマイラは頭がライオンで胴体がヤギで尻尾がヘビである。実際には、このような生き物は存在しない。しかし、われわれは想像力によって、キマイラの観念を創作することはできる。神がキマイラと同じようなものであることはありえないし、われわれが勝手に想像力によって神を創ることはできないのである。したがって、神の観念は作為的観念ではありえないのである。そうすると、残るは生得的観念ということになる。われわれが「神の観念」を認識できるというのは、それがまさに神によって与えられた観念であり、「神が私を創造したとき、あたかも自分の作品に刻まれた製作者のしるし」<sup>38</sup>として、われわれのうちに植えつけた観念ということになる。つまり、われわれが「神の観念」を持つ以上、生得観念を認めなければならなくなるというのが、デカルトの立場である。このようにデカルトが生得観念説を支持する理由は、神の観念を外来的観念や作為的観念に求めることができなかったからである。神の観念が生得観念であるからこそ、神の観念から神の存在に向かう神の存在証明が成り立ち、神の保証というデカルト全体の体系が成り立つのである。それは、最初の懐疑で感覚を認識の次元から排除したことによって、神の観念は生得観念でしかありえないことになったのである。

しかし、注意しなければならないのは、最初から神の観念が生得観念であるとして神の存在証明の文脈に持ち込むと、循環することになってしまうという点である。

## 6. ロックは生得観念説の何を批判したのか

デカルトが生得観念説を採用しなければならなかったのは、彼の哲学の体系からして、そうせざるをえなかったということである。逆に、ロックの立場で考えると、ロックが生得観念説を批判したのは、素朴な形の生得観念説であった。カーペンター、スティリングフリート、サウスといった素朴な生得観念説の考え方は、文字通り観念が生得的にあり、魂に刻まれた知識とされ、それが知識の確実性の根拠になっていたのである。田中によれば、「このロックの批判は、何よりもそれまで知識の確実性根拠を観念の生得性のうちに求めることにより、そこに道徳ならびに宗教の支柱を求めてきたそれまでの政治的宗教的独断主義の批判を意味する」<sup>39</sup>ものとする。つまり、ロックは認識論上の問題ばかりではなく、政治的宗教的な意味でも問題にしており、むしろ生得観念説を主張する伝統思想と戦

っていたと言えるのである。ロックの生得観念説批判は、古い伝統思想の確実性を覆すために行っていたと言える。ロックは生得観念説を否定することによって、新しい確実性を主張していたとも言えるのである。

また、ロックの論敵は素朴な生得観念説を主張する者たちであることは明らかだが、他方、同じケンブリッジ・プラトン学派のヘンリー・モアは洗練された生得観念説を主張していた。こちらは、むしろロックに近い考え方であり、生得性は潜在的な能力と考えていたからである。まさに、これはデカルトの「生まれつき備わっている真理のある種子」という比喻に一致する考え方である。それもそのはずで、モアはデカルトから影響を受けており、初めはデカルト哲学に傾倒していたと言う。また、デカルトの晩年には直接、書簡のやり取りもしているのである。したがって、モアの洗練された生得観念説はデカルトの影響も考えられるのである。

こうしてみると、生得観念説を主張していたデカルトが、それまでのアリストテレスの古い学問観を覆すために、揺るぎない確実なものを求めて、新たな学問の基礎づけを行ったのとロックが素朴な生得観念説を批判して行おうとしていたのも、方法や手段は違えども、古い学問観・古い伝統思想を覆すという目的は同じであったように思える。目指すべきゴールは同じでもそこに至るルートは明らかにデカルトとロックは異なっているのである。

## おわりに

ここまで、合理論の代表者としてデカルトの見解と経験論の代表者としてのロックの見解を見てきた。しばしば、合理論と経験論は生得観念という点でも対立していたように思われていた。しかし、デカルトの生得観念説が曖昧であるがため、生得観念が何を意味しているのかで変わってくるのである。すなわち、生得観念は概念を獲得する「能力」なのか、精神的行為によって知覚される「対象」なのかでその意味は異なる。「対象」と考えれば、経験論からの批判は、的を射る批判である。しかし、「能力」と考えれば、むしろ経験論に近い考えになる。デカルトには、この両方のどちらにも取れる言い方をしているがために生得観念の意味が曖昧なのである。

また、ロックはそもそも合理論の生得観念説を批判したというよりもイギリス国内のケンブリッジ・プラトン学派の素朴な生得観念説を主張していた人たちを論敵としていたということである。彼らの立場は、まさに観念が生得的に備わっており、それが知識の根拠



となっていたのである。そして、ロックはその古い確実性から新しい確実性に変えるために、生得観念説を批判していたのである。

そうすると、ロックとデカルトは、各々自分がやろうとしていた方法や手段は、お互いに異なっていたが、その目指すべき目的は一致していたのではないかと思われる。デカルトはこれまでのアリストテレスの学問観である目的論的自然観から新しい学問観として機械論的自然観を立ち上げようとした。そのために確実なものを求めて、懐疑を行った。その懐疑を行う上で、最初に排除したのが感覚である。一方、ロックは伝統思想の知識の古い確実性から脱却するために、素朴な生得観念説を批判し、そのことによって知識の新しい確実性へと変えようとしたのである。そして、感覚から由来する観念を知識の基礎に置いた。したがって、デカルトもロックも古い体質から新しいものへと変えようとする目的は同じでも、その方法や手段は異なっていたのである。（金沢大学大学教育開発・支援センター特任助教）

## 注

- 1 たえば、パークリの言う観念は、われわれの感覚器官に与えられた知覚のことであると言う。彼の立場に立てば、知覚されたものとは別に、他の物質が存在することはありえないという「非物質論」であり、「知覚の一元論」である。「存在するとは知覚されることである」、「物を観念にするのではなく、観念を物にするのが私の考えだ」という言葉に、パークリの立場が現れている。また、カントに到っては、われわれには物自体を認識することができないという立場であり、われわれの経験の対象は物自体ではなく、物自体の現象であり、われわれが認識しているのは客観的表象であるとする。
- 2 ドラえもんやアンパンマンのような虚構としての存在者が存在するかどうかという議論は、虚構の哲学という分野で議論されている。代表的なのがフィクショナリズムという立場である。この議論については、また別の機会に取り扱いたい。
- 3 プラトンに言わせれば、点や線や三角形などの数学的对象はイデア界に存在するということになるだろう。数学的对象の存在的身分については、数学の哲学の分野で、数学的実在論と数学的唯名論という立場で議論されている。
- 4 デカルトからの引用は *Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, J.Vrin, 1996. からとし、これを AT と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。訳文については、「反論と答弁」は白水社の『デカルト著作集[2]』により、『方法序説』、『省察』は、ちくま学芸文庫による。また、書簡の訳については、『デカルト全書簡集 第4巻』、『デカルト全書簡集 第8巻』（知泉書館）による。AT. VII.37-38.（邦訳：『省察』pp.62-63.）
- 5 AT. III. 383.（邦訳：『デカルト全書簡集 第4巻』pp.351-352.）
- 6 AT. V.354.（邦訳：『デカルト全書簡集 第8巻』p.194.）

- 7 AT. VII. 68. (邦訳：『省察』 p.104.)
- 8 AT. VII. 51. (邦訳：『省察』 p.81.)
- 9 AT. VI. 64. (邦訳：『方法序説』 pp.95-96.)
- 10 山田弘明 訳注 201 所収『方法序説』 p.251.
- 11 AT. VII. 189. (邦訳：『デカルト著作集[2]』「第三答弁」 p.229.)
- 12 正確には、『人間知性論』の第一巻のタイトルは「生得思念について」ということで、観念 (idea) ではなく、思念 (notion) である。しかし、大槻が翻訳書の『人間知性論 (一)』(岩波文庫)の注で述べているように「第一巻の論究はふつう生得観念の否定論として知られているが、ロックが観念という語を避けて、思念という語を選んだのは、個々の観念の非生得性だけでなく、原理ないし命題の非生得性を論じ、むしろ後者から論究を開始したからであろう」(p.244.)としている。また、同書で思念についても「ロック哲学に即した専門語としては、観念 idea とまったく同義であるが、観念の場合にも時おり見られるように、考えとか思想とかいう広い漠然とした意味に用いられることがある」(p.239.)としている。そのため、思念 (notion) と観念 (idea) は同じ意味で考える。
- 13 ロックの『人間知性論』からの引用は、*An Essay concerning Human Understanding*, edited by Peter H. Nidditch, Oxford University Press, 1975. からとし、これを *Essay* と略記し、巻-章-節の番号によって表し、その巻をローマ数字、章と節をアラビア数字で示す。同版のページ数も付記する。引用のなかの丸括弧は、筆者による。訳文は大槻春彦 『人間知性論 (一)～(四)』(岩波文庫) (一) 1972, (二) 1974, (三) 1976, (四) 1977 による。Essay, I-1-8. (p.47.) (邦訳：『人間知性論 (一)』 pp.39-40.)
- 14 *Essay*, II-1-1. (p.104) (邦訳：『人間知性論 (一)』 p.133.)
- 15 *Essay*, IV-1-1. (p.525.) (邦訳：『人間知性論 (四)』 p.7.)
- 16 AT. III. 392-393. (邦訳：『デカルト全書簡集 第4巻』 p.366.)
- 17 AT. VII. 181. (邦訳：『デカルト著作集[2]』「第三答弁」 p.219.)
- 18 *Essay*, I-2-1. (p.48) (邦訳：『人間知性論 (一)』 p.41.)
- 19 *Essay*, I-2-5. (p.50.) (邦訳：『人間知性論 (一)』 pp.43-44.)
- 20 *Essay*, I-4-8. (pp.87-88.) (邦訳：『人間知性論 (一)』 pp.105-106.)
- 21 *Essay*, I-4-17. (p.95.) (邦訳：『人間知性論 (一)』 p.118.) 英語の原文は初版から第五版まで第15節が重複している。そのため、引用した英文では第17節であるが、翻訳では第18節となっている。
- 22 *Essay*, II-1-2. (p.104.) (邦訳：『人間知性論 (一)』 p.134.)
- 23 *Essay*, II-16-1. (p.205.) (邦訳：『人間知性論 (二)』 p.77.)
- 24 *ibid.*, (p.205.) (邦訳：同上 p.77.)
- 25 Anthony Kenny, *Descartes; A Study of His Philosophy*, pp.101,109. Random House, 1968.
- 26 大槻春彦「解説 (第一分冊)」 所収 ジョン・ロック 『人間知性論 (一)』 p.312.
- 27 Richard I. Aaron, *John Locke*, pp.93-94. Oxford University Press, 1971.
- 28 *Essay*, II-1-2. (p.104.) (邦訳：『人間知性論 (一)』 p.133.)
- 29 *Essay*, I-3-22. (p.81.) (邦訳：『人間知性論 (一)』 p.96.)
- 30 AT. VI. 1. (邦訳：『方法序説』 p.18.)

- <sup>31</sup> AT. VII. 264. (邦訳：『デカルト著作集[2]』「第五反論」p.318.)
- <sup>32</sup> AT. VII. 356-357. (邦訳：『デカルト著作集[2]』「第五答弁」p.432.)
- <sup>33</sup> Richard I. Aaron, *op.cit.*, p.92. Oxford University Press, 1971.
- <sup>34</sup> 大槻春彦 前掲書 p.313.
- <sup>35</sup> John W. Yolton, *John Locke and the Way of Ideas*, pp.29-30. Oxford University Press, 1956.
- <sup>36</sup> *ibid.*, p.39
- <sup>37</sup> AT. VII. 18. (邦訳：『省察』 p.35.)
- <sup>38</sup> AT. VII. 51. (邦訳：『省察』 p.81.)
- <sup>39</sup> 田中正司 『増補 ジョン・ロック研究』 p.51. 未来社 1968年

## 参考文献

- Aaron, R. I. *John Locke*, Oxford University Press, 1971.
- Descartes, René, *Ceuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris, J.Vrin, 1996.
- デカルト (福居純訳) 「第三反論と答弁」所収『デカルト著作集[2]』白水社 1973年 (増補版) 1993年)
- デカルト (増永洋三訳) 「第五反論と答弁」所収『デカルト著作集[2]』白水社 1973年 (増補版) 1993年)
- デカルト (山田弘明訳) 『省察』ちくま学芸文庫 2006年
- デカルト (山田弘明訳) 『方法序説』ちくま学芸文庫 2010年
- 『デカルト全書簡集 第4巻』(大西克智・津崎良典他訳) 知泉書館 2016年
- 『デカルト全書簡集 第8巻』(安藤正人・山田弘明他訳) 知泉書館 2016年
- Ichinose, M. (一ノ瀬正樹) 『人格知識論の生成 ジョン・ロックの瞬間』東京大学出版会 1997年
- Kenny, A. *Descartes ; A Study of His Philosophy*, Random House, 1968.
- Koike, H. (小池英光) 「第三章 ロックの認識論と先行思想 ——デカルトを中心として——」所収 田中正司・平野耿責任編集『ジョン・ロック研究 イギリス思想研究叢書4』pp.55-80. 御茶の水書房 1980年
- Locke, J. *An Essay concerning Human Understanding*, edited by Peter H. Nidditch, Oxford University Press, 1975.
- ジョン・ロック (大槻春彦訳) 『人間知性論 (一)』岩波文庫 1972年
- ジョン・ロック (大槻春彦訳) 『人間知性論 (二)』岩波文庫 1974年
- ジョン・ロック (大槻春彦訳) 『人間知性論 (三)』岩波文庫 1976年
- ジョン・ロック (大槻春彦訳) 『人間知性論 (四)』岩波文庫 1977年
- Tanaka, S. (田中正司) 『増補 ジョン・ロック研究』未来社 1968年
- Yamada, H. (山田弘明) 『デカルト『省察』の研究』創文社 1994年
- Yolton, J. W. *John Locke and the Way of Ideas*, Oxford University Press, 1956.